

ポーランド、スロバキア、チェコの 日本学科合同合宿の試み

瓜生 佳代 アレキサンドラ・シュチェフラ
スタニスワフ・マイヤー アンナ・チャスカ

1. はじめに

ポーランドでは、現在5つの大学に主専攻としての日本学科が設置され、学生たちはそこで日本語および日本の文化、社会、歴史など日本学を熱心に学んでいる。日本語学習は日本理解のための手段の一つでもあり、日本語教育は日本研究の振興とともに発展してきた。最近ではアニメやJポップなど日本のポップカルチャーが日本語教育の広がりに影響を与えているが、大学における日本研究の振興が日本語教育発展の牽引力であることにはかわりはない。近隣のチェコやスロバキアでも同様の状況であり、日本学科の講師たちの間には国際学会や日本語研修会などを通して一部ネットワークが形成されている。

2008年3月スロバキアのブラチスラバで、笹川中欧財団による、日本と中欧諸国の交流促進のための会議^①が開かれた。そこで、ポーランド、スロバキア、チェコ、ハンガリーの日本学科の講師陣が顔をあわせ、同じ学問的興味を有する学生同士の交流も進めてはどうかという話になった。日本研究というキーワードで異なる国の学生たちが集い、互いに情報交換したり刺激を与え合ったりする機会を作ろうというものである。その後ポーランドのヤギェロン大学の講師が中心になり、チェコとスロバキアとの協力で3カ国の学生合同日本学合宿が計画された。そして、2009年4月にポーランドとスロバキアの国境に近いザコパネ近郊のムルザシフレで、総勢166名が参加する4泊5日の合同合宿が実現した。

本稿では、この大掛かりな合宿の実施概要と、実施にいたるプロセスについて報告する。そして、今後同様の合宿を行う際の新たな可能性を提示する。

2. 合宿の概要

合宿は、2009年4月15日（水）から19日（日）にかけて、ムルザシフレのペンションで行われた。参加者は15日にクラクフの日本美術技術博物館 Manggha（通称マンガセンター）に集合し、そこから貸し切りバスで会場となるペンションへ移動した。以下、合宿の概要を述べる。

2.1 合宿の目的

- ①日本学科の学生に日本学の様々な分野の専門家の講義を聞く機会を提供する。
- ②異なる国／機関の学生がともに学び情報交換することで親睦を深め、今後の学習への意欲を高める。
- ③日本学科間の国を超えたネットワーク作りを進める。

2.2 参加者

3か国5大学から135名の学生および6か国から28名の教員、そして日本人ゲスト3名の、計166名が参加した。ポーランドからは、クラクフのヤギェロン大学、ポズナニのアダム・ミツケヴィチ大学、トルンのコペルニクス大学、スロバキアからはコメンスキー大学、チェコからはカレル大学の学生が参加した。

表1 参加者の国別人数

	国	人数		国	人数(内日本人)
学生	ポーランド	116名	教員	ポーランド	21名(7名)
	スロバキア	12名		スロバキア	2名(0)
	チェコ	7名		ハンガリー	2名(2名)
日本人 ゲスト	ポーランド	3名		セルビア	2名(2名)
				日本	1名(1名)

表2 ポーランドからの参加者の所属先別内訳

	所属機関	人数		所属機関	人数(日本人)
学 生	ヤギェロン大学	56名	教 員	ヤギェロン大学	8名(2名)
	アダム・ミツケヴィチ大学	48名		アダム・ミツケヴィチ大学	8名(2名)
	コペルニクス大学	12名		コペルニクス大学	3名(1名)
				ポーランド日本情報工科大学	1名(1名)
				ポーランド日本語教師会	1名(1名)

講義はすべてポーランドの大学からの教員（博士課程在籍者を含む）が担当した。そのうち2名は日本語セッションも担当した。

2.3 合宿スケジュール

合宿の流れは以下表3のとおりである。

ポーランド、スロバキア、チェコの日本学科合同合宿の試み

表3 合宿スケジュール

4月 15日 (水)	9:00-13:00	クラクフのマンガセンター集合 日本文化についてのワークショップ			
	14:15-17:00	マンガセンター出発 ムルザシフレ着			
	17:15-18:00	オリエンテーション			
	18:00-19:00	夕食			
	19:00-	開会式 および 懇親会 (全体)			
4月 16日 (木)	8:00-8:45	朝食			
	9:00-9:45	全体講義1			
	10:00-10:45	全体講義2			
	11:00-12:30	言語学1	文学1	メディア1	書道1
	12:45-14:15	言語学2	文学2	メディア2	書道2
	14:15-15:45	昼食			
	15:45-16:45	日本語1-①	日本語2-①	日本語3-①	日本語4-①
	17:00-18:00	日本語1-②	日本語2-②	日本語3-②	日本語4-②
	18:00-19:00	夕食			
19:00-	懇親会 (学生、教師別)				
4月 17日 (金)	8:00-8:45	朝食			
	9:00-10:30	芸術1	ジェンダー1	歴史1	書道3
	10:45-12:00	芸術2	ジェンダー2	歴史2	書道4
	12:15-13:15	全体講義3			
	13:30-14:15	全体講義4			
	14:15-15:45	昼食			
	15:45-16:45	日本語1-③	日本語2-③	日本語3-③	日本語4-③
	17:00-18:00	日本語1-④	日本語2-④	日本語3-④	日本語4-④
	18:00-19:00	夕食			
19:00-	映画/個別懇親会				
4月 18日 (土)	8:00-8:45	朝食			
	9:00-18:00	ハイキング			
	18:00-19:00	夕食			
	19:00-	閉会式 キャンプファイヤー			
19日 (日)	8:00-8:30	朝食			
	9:00-	バスでクラクフへ			

合宿は大きく①講義、②日本語セッション、③交流時間の3つのパートに分けられる。

①講義：日本文化に触れたり、専攻する日本学についての専門性を深めたりする時間である。一日目に集合場所であるクラクフのマンガセンターで、茶の湯、生花、浮世絵など日本文化に関する講義やワークショップが開かれた。二日目、三日目は、全体講義のほか、言語学、文学、メディア、芸術、歴史、ジェンダーなど分野別の講義が行われ、学生たちはそれぞれ自分の興味にあったテーマを選択して聴講した。講義のテーマはあらかじめWebサイトに提示されており、学生たちは事前にどの講義を聴講するか決め、レジュメをプリントアウトして持参した。なお、全体の進行や講義は初級の学生も参加できるように英語で行われた。また、選択講義の時間と平行して、書道のワークショップが開催された。

②日本語セッション：日本語を使って互いに交流する時間で、二日目、三日目の午後2コマずつ設けられた。日本語1（1年生41名）、日本語2（2年生32名）、日本語3（3年生31名）、

日本語4 (4年生以上31名) の4つのレベルにクラス分けをした。日本語1、2クラスが日本語を使ったゲームやそれぞれの町や大学を紹介しあう活動など、日本語3、4クラスが町や大学の紹介、マンガを使ってのストーリー作成、ビデオを見てのディスカッションなどを行った。1つのクラスに講師2名が入り、一日目と二日目は異なるレベルのクラスを担当した。

③交流時間：学生同士の交流機会を与える目的で設定したのが、初日の懇親会、四日目のハイキングとキャンプファイヤーである。懇親会では、各大学が寸劇などを披露してそれぞれの大学や町の紹介をした。

3. 合宿実施までのプロセス

この合宿の準備、実施のために、ヤギェロン大学の講師有志で協力体制が組まれた。企画の提案者が全体のコーディネーターを務め、その他、会計係、学生係、日本語セッションコーディネーターなどの役割が分担された。以下準備の流れを記す。

1. 日程をイースター休暇明けの週に決定、研修設備などが整ったペンションを探し、宿泊料などの交渉を行った。
2. 各大学に計画を通知、参加を呼びかけた。
3. 各大学の日本学関係の教授／講師陣に講義を依頼した。
4. 日本語セッションの講師および日本人留学生など日本人に参加を呼びかけた。
5. 資金調達のため、国際交流基金ブダペスト文化センターのローカルサポートプログラムをはじめ、いくつかの団体のプロジェクトに助成申請書類を提出した。
6. 合宿のWebサイトを設け、ヤギェロン大学日本学科のサイトからリンクした。
7. 講義担当教員に講義のタイトル、要旨、参考文献などの提出を依頼し、サイトにアップした。
8. 各大学に参加者の人数確認を依頼。会場のペンションに申し込み金を振り込んだ。
9. ブダペスト日本語文化センターで開催された中東欧地域日本語教育ネットワーク会議でポーランド日本語教師会代表より合宿計画の紹介、日本語セッション講師およびゲスト参加者募集の呼びかけを行ってもらった。
10. 日本語セッション担当講師がほぼ確定した段階で、クラス分け、担当体制などを決めた。各大学に学年別の使用テキストおよび進度を問い合わせしておおまかなレベルを把握し、担当講師に連絡した。活動内容は基本的にペアを組む講師で話し合うことにした。
11. ペンションへ最終下見に赴き、教室、器具などをチェックした。
12. 初日のマンガセンターでのワークショッププログラムの打ち合わせおよび昼食の手配、クラクフームルザシフレ間のバスの手配、ハイキングのためのバス、ガイドの手配を行った。
13. 講義、日本語セッションに必要な教材の手配、購入を行った。

14. 合宿地での注意事項をまとめ、参加者に連絡した。
15. 学生へは学生係を通じて、逐次連絡、必要な指示を出した。
16. 当日は、教室、宿泊部屋の割り当て、スケジュール掲示、音響設備のチェックなどを行った。
17. 合宿後、会計処理、アンケートの集計、報告書作成を行った。

なお、本合宿実施にあたっては、国際交流基金ブダペスト日本文化センターローカルサポートプログラムの助成を受けた。その他、各大学および他機関からの助成金、学生の参加費などが経費に当てられた。

4. 合宿に対する評価

4.1 学生による評価

アンケートでは、回答者（113名）の98%が次回の合宿にも参加したいと答え、ぜひ毎年開催してほしいという要望が多く寄せられた。学生たちがこの合宿を意義あるものにとらえたことがわかる。この合宿に参加することで日本に対する興味がさらに深まったと答えた学生は、回答者109名中84名で77%であった。

日本学の講義については、5段階評価（poor 1－2－3－4－5 excellent）で平均4.6と評価が高く、いろいろな分野の講義が聞けてよかったという声が多かった。様々な専門分野の講師が集まり、興味深い講義を提供することで学生たちの興味の幅が広がったといえよう。

一方、日本語セッションのほうは平均評価が3.6と講義に比べて低かった。その主な原因として、活動内容や使用する日本語のレベルが低すぎると感じた学生が多かったことがあげられる。日本語クラスも楽しく交流する活動の一場面と位置づけコーディネートしていたが、セッションのコンセプトを明確にしていなかったため、一部の学生の期待するものと内容が異なってしまったかもしれない。

他大学の学生との交流から刺激を受け学習意欲が高まったかという質問に対しては、5段階評価の5をマークした学生が35名で最も多く、4が25名、3が13名、2が10名、1が17名であった。2や1をマークした学生の中には交流の機会がうまく持てなかった学生もいたようだが、合宿の前から日本語に対する関心は高く学習意欲に関しては変化なしと答える学生も数名あった。

この合宿で何が得られたかという質問に対しては、新たな知識、仲間を得たという答が最も多く、論文執筆のインスピレーションやパワーを得た、学習のモチベーションが高まったなどの答も見られた。これら学生のアンケート結果を総合してみると、興味の幅を広げ、学習意欲を高める、親睦を深めるという目的はおおかた達成できたといえる。

4.2 日本語セッション担当講師による評価

アンケートには、日本語セッションを担当した10名のうち1名を除くすべての講師がこの合宿に参加して得られるものがあつたと答えた。他大学の学生の様子やレベルがわかつたこと、それによって自分の現場を客観的に見られるようになったこと、他の先生の授業を見たりペアを組んだりしたことで授業のアイデアが得られたこと、他の先生と知り合い情報交換ができたこと、学生と交流し自分の国のことを他国の学生に伝えられたことなどがあげられており、講師の側にとつてもこの合宿が有意義であつたことがわかつた。なお、講義担当講師からの評価は集めることができなかった。

4.3 今後の可能性

今回の合宿は、日本学の知識を深めることと、日本語の運用／日本語での交流を二つの柱としたものであつた。ポーランドの日本学科ではこれまでも一機関内の日本語合宿が行われているが、日本学を組み込んだ国際的な合同合宿は今回が始めての試みである。合同合宿の強みを生かした多彩な講義により学問的側面ではかなり充実したものになった。一方、日本語運用の面では、日本語学習を目的にした日本語合宿に比べ、日本語使用の機会が限られた。日本語学習に焦点を当てるとすれば、講義の部分を切り離し、日本語国際合宿の形にすることも考えられるが、貴重な機会をすべての面で生かしたいという考えもあり、議論がわかれるところである。いずれにせよ、国際合宿は現実に日本語を媒介語として使用できる場であり、次回はそのチャンスを最大限に生かしたプログラムになるよう工夫していきたいと考える。

また、合宿は日本語を教える教師側にとつてもいい学びの場となつた。授業はすべてオープンで、自由に見学、参加できるようにした⁽²⁾。また、一つのクラスをペアで担当したことで、教案などについて話しあういい機会となつた。残念ながら今回は準備期間も限られており、教師の学びという側面を明確に打ち出していなかつたが、目的意識をはっきりさせ、時間をかけて準備すれば、貴重な実習研修の機会となる。たとえば、セミナーやワークショップを事前に行い、その後合宿でチーム実習すれば、高い研修効果が期待できるだろう。講師が集まれる時期や費用など検討すべきことは多々あるが、今回の合宿を通して可能性が見えてきたように思う。

同様に、日本研究に携わる教授陣からも、合同合宿という機会を、単に研究成果を学生に講義する場だけではなく、研究者同士が互いに発表し合い議論できる場にしたいという声がかかれた。これが定例化していけば、日本学科間のネットワークはさらに強いものになっていくだろう。

5. おわりに

以上、ポーランド、スロバキア、チェコの3か国5大学の日本学科の合同合宿について、その企画から実施までのプロセスと、プログラムの評価、今後の可能性について報告した。

合同合宿はさまざまな可能性を持つが、規模が大きくなればなるほど、実行する側の体制作りが重要になる。今回は一講師の強力な実行力に負うところが多かったが、継続していくためには個人に負担がかかりすぎないように役割分担を考えていくことも必要である。今後の合宿のあり方、実行委員会の組織の仕方などを検討する上で、今回の経験を生かしていきたいと思う。

〔注〕

^①会議名：Enhancing Mutual Exchange Between Japan and Central European Countries

〔The Sasakawa Central Europe Fund〕

<http://www.spf.org/e/publication/annual/pdf/ar_07_7.pdf>参照。

^②ただ時間割の関係ですべての教師が他クラスを見学できたわけではない。

〔参考文献〕

国際交流基金ブダペスト日本文化センター（2009）『中東欧地域における日本語教育事情－中東欧地域日本語教育ネットワーク会議報告書－』国際交流基金

